

長崎県の滅びゆくハマボウ群落の記録 2

中西 弘 樹¹⁾Extinct localities of *Hibiscus hamabo* community in Nagasaki Prefecture 2Hiroki NAKANISHI¹⁾

ハマボウは海水が流入する河川の下流部や河口、入江、ラグーンなどの塩湿地に生育しているが(中西1979; Nakanishi1985など), このような立地は河川改修や護岸工事, 埋め立てなどによって消滅しやすい. すでに消滅した生育地を記録に残しておくことは, 本来の分布を知る上で重要である. 特に大村湾沿岸や有明海沿岸部などのように, 古くから沿岸部が利用されてきた地域は, 沿岸の潜在自然植生が何であったかもわからなくなっている. それを解明する手がかりの1つは, 絶滅した生育地を調べることである. また, 野生生物が少なくなっていく具体例を示すことは, その現状を示し, 保全対策を講じるためにも必要なことである. 前報(中西2001)は群落のみを対照としたが, 今回は分布上重要な産地の場合には単木も含めた. また地形図を見て, 生育していた可能性のある地区での聞き取り調査も行い, かつての生育状況などを確かめた例も含めて報告する. 本報文に用いた地図は国土地理院発行2万5千分の1地形図の「面高」「神浦」「長浦」「長崎西南部」のそれぞれ一部を用いた.

1. 西彼杵郡西海町中浦, 江川内川下流部 (図1)

地元での聞き取り調査では河口付近から約250m上流部までの間に10株余りが群生していたという. 今は野生のものは1株も見られず, 近くの民家にそこから採集した1株だけが栽培

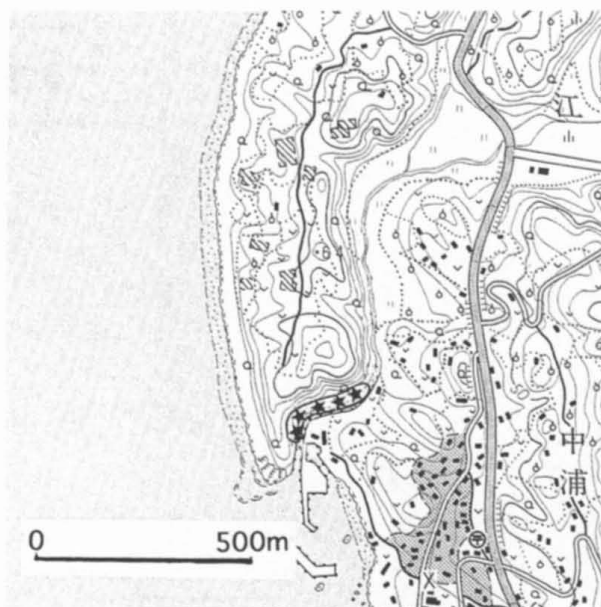


図1 西海町江川内川下流部.
星印に囲みは消失した群落を示す.



図2 江川内川下流部のハマボウ群落があったところ.

されている. 1985年調査に基づく国土地理院2万5千分の1地形図では下流部に護岸が見られ

1) 〒852-8521 長崎市文教町1-14 長崎大学教育学部生物学教室

ず、2000年調査に基づく地形図では護岸が示されていることから、10年ほど前の護岸工事で消滅したことになる（図2）。それは聞き取り調査でも同様なことが確認された。この集落出身の70才の女性の話では、この花を取ると雨が降ると祖母から言われていたので、取らなかったと言う。地元ではハマボウのことを「ホウノキ」と呼んでいた。

2. 西彼杵郡大瀬戸町雪浦上郷，河通川下流部（図3）

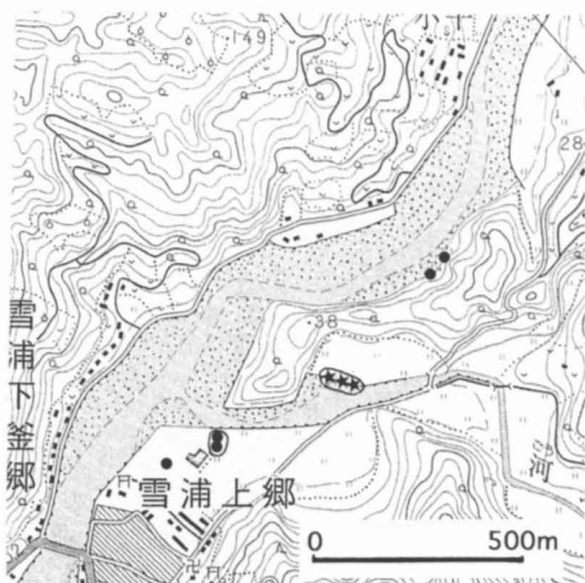


図3 大瀬戸町雪浦川下流部。星印に囲みは消失した群落，黒丸は現存する個体，黒丸に囲みは現存する群落を示す。

20年余り前までは寺尾橋より下流部右岸に20株ほどの群落があり、1982年の長崎大水害の時には、周辺の堤防で破壊された部分もあったが、ハマボウ群落は破壊を免れた。しかし、水害後の河川改修と護岸工事のために消失した（図4）。現在その部分の堤防の内側は、シオクグ、シチトウイ、シマエンジュが1株見られ、わずかに塩湿地が発達していた面影を残している。海水は満潮時に寺尾橋より少し上流まで上り、川床には今でもナガミノオニシバとシオクグが残存している。現存しているハマボウは、雪の浦本流の河口から約1.6km地点の左岸に2株、それよりかなり上流部の河口から約2.6km地点の右岸に1株、下流部の雪浦上郷の弁天島の縁に小

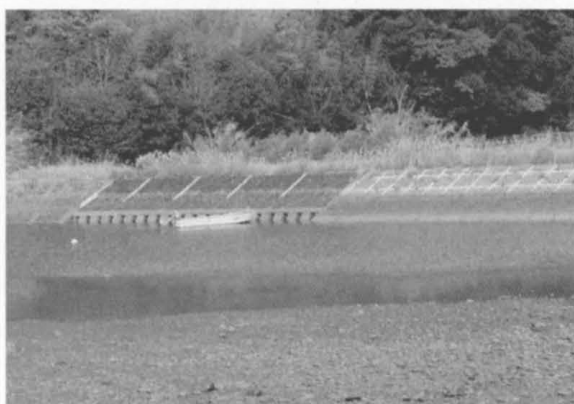


図4 雪浦川の支流の河通川のハマボウ群落があったところ。

さいものも含めて8株、畑に囲まれた低湿地に3株が生育している（図3）。雪の浦地区で最大の群落であっただけに残念である。雪の浦川は西彼杵半島最大の川で、下流部は干涸が発達し、汽水域に生息する生物には貴重な環境となっている。植物ではかつてはハマナツメも記録されていたし、現在でもナガミノオニシバ、ハママツナ、シオクグ、ハマサジが見られる。

3. 琴海町戸根郷，戸根川下流部（図5）

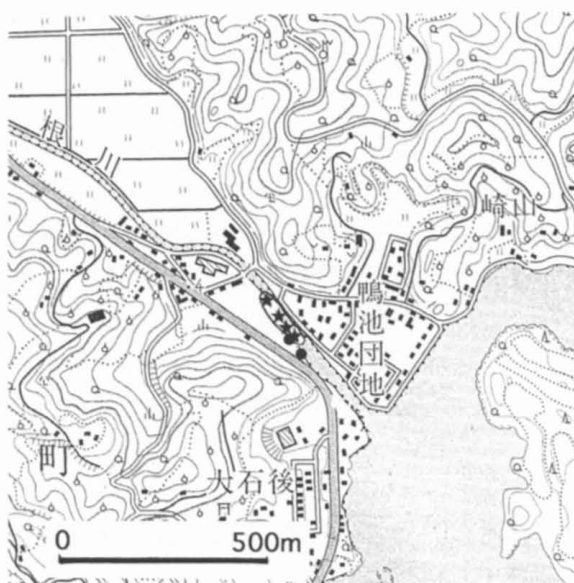


図5 琴海町戸根川下流部。星印に囲みは消失した群落，黒丸は現存する個体を示す。

10株以上あったが（図6-a）、2002年の護岸工事によって消滅した（図6-b）。現在は護岸の内側にある溝に2株が生育しているのみである。この護岸は内側に大きな溝があり、その内

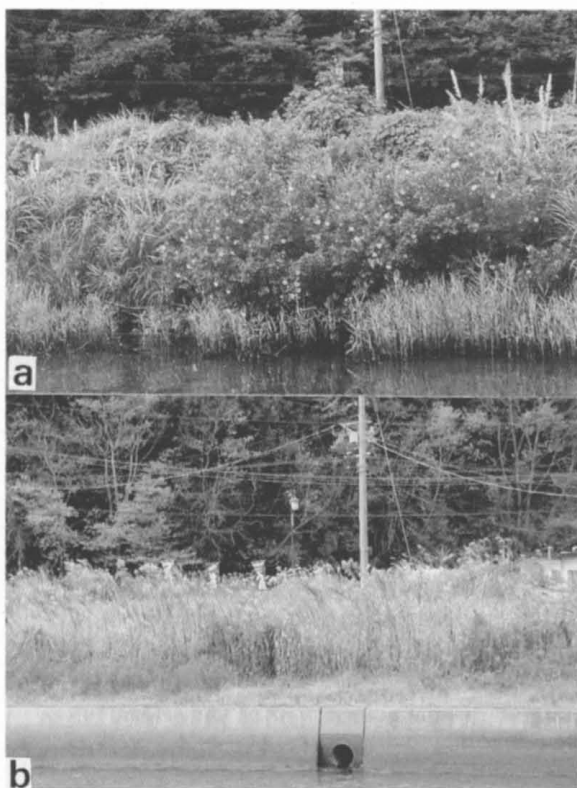


図6 鴨池団地から国道方面を見た景観の変化
a: 川沿いに10株が見られた(2000年7月撮影), b: 2002年の護岸工事によって消失した(2004年12月撮影)。

側が空き地となっており, 特に護岸が必要とは思われない。

4. 長崎市磯道町, 鹿尾川下流部(図7)



図7 長崎市鹿尾川下流部。星印は消失した個体を示す。



図8 磯道町側から国道方面を見た景観の変化
a: かつては広大な塩生植生が発達していた。左手の後方にハマボウが見られる(1978年7月撮影)。b: 現在は塩生植生は全く見られない(2004年7月撮影)。

長崎市南部の鹿尾川下流部は長崎市周辺部では最も豊富に塩生植生が発達していた所で, 珍しくヒロハマツナの大きな群落があり, ハマボウ, ナガミノオニシバ, シオクグ, ハマサジが生育していた(図8-a)。ハマボウは国道沿いの石垣に1本, 鹿尾川下流の互助乃橋のたもとに2本(図9)が生育していた。これらの塩生



図9 互助乃橋のたもとに生育していたハマボウ(1978年7月に撮影)。

植物は1982年の長崎大水害後，河川改修と護岸工事によって消滅した（図8-b）。河川改修が行われた部分よりも上流まで生育していたハマサジとシオクグは絶滅が免れた。しかし，1999年から始った河川改修によってこれら2種もほとんど見なくなった。

引用文献

- Nakanishi, H.1985. Geobotanical and ecological studies on three semi-mangrove plants in Japan. Jap. J. Ecol. 35:85-92.
- 中西弘樹 1979. ハマボウ群落の分布と生態. 植物分類地理30:169-179.
- 中西弘樹 2001. 長崎県の滅びゆくハマボウ群落の記録. 長崎県生物学会誌 (53) :17-18.